長野大学紀要　第18巻第4号　73—77頁（515—519頁）1997

『グリム童話集』注釈の試み (5) (KHM 9～11)

Untersuchungen der Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm (5) Nr. 9～11.

小　高　康　正*
Yasumasa Kotaka

KHM 9
Die zwölf Brüder
「十二人の兄弟」

1　アールネ／トンプソンの話型分類では、魔法昔話の451番「兄弟を探す娘」にあたり、次のような構造になっている。

Ⅰ. 兄弟とその妹
Ⅱ. 兄弟はカラスに変えられる
Ⅲ. 妹による探索
Ⅳ. 中傷される
Ⅴ. 魔法が解ける

グリムの話では、王に男ばかり十二人の子どもがいたが、十三人目に女の子が生まれてくると十二人の兄弟を殺すように命じる。兄弟は森の中へ逃げる。妹は大きくなり、十二人の兄たちを探す。一度は森の中で彼らを見つけ、共に暮らすが、不注意で十二本の百合を折ったため、兄たちはカラスになって飛び去る。彼らを救うため、妹は七年間の沈黙を課せられる。よその国の王がやってきて、娘を自分の国へ連れていき、妃にする。しかし娘は一言も話さず、笑いもしなかったため、悪い継母のたくらみで、火刑にされる。だが十二羽のカラスが飛んできて、七年目で魔法が解け、人間の姿に戻り、妹を救い出す。最後に、継母は死刑にされる。

このタイプの話はヨーロッパではよく見られ、グリム童話の中でも他にKHM49「六羽の白鳥」(Die sechs Schwäne) やKHM25「七羽のカラス」(Die sieben Raben) も、同様に追放されたり、魔法にかけられた兄弟を妹が探して救うという話である。

バジーレの『ペンタメローネ』の「七羽の鳩」(四日目第八話) もグリムの話と異なる部分もあるが、同じタイプの話である。

男ばかりの七人の兄弟は、さらに男の子が生まれれば自分たちは旅に出かけるという。生まれたのは女の子であったが、産婆が知らせの合図を間違ったために、七人兄弟はどこかに行ってしまう。妹が探しに行くが、摘んではいけない草を採ったために兄弟は鳩になって飛んでいってしまう。さまざまな冒険の末、兄たちは救われ、全員金持ちになる、というものである。

兄たちを救うために妹が<時の母>を探すというモチーフはグリムには見られない。

また、アンデルセンの名作の一つ「野の白鳥」も同じ題材を扱ったものである[1]。しかし、アンデルセンの場合、創作童話として叙情的に語られ、全体的にドラマチックに仕上げられている。

日本昔話では、「継子譚」のなかの「七羽の白鳥」(大成214番) が同じタイプに属す。

1. 兄弟八人。継母にいじめられて家を出ようと父に相談する。継母に聞かれて兄七人は白鳥にされる。
2. 末の妹が継母にいじめられるので、白鳥が葛で網をつくって島に連れ行く。
3. 白髪の爺が夢に現われて、庭の草で三日間に七枚の着物をつくり、兄たちに着せると人間になると教える。

* 教授

4. 七羽の白鳥は人間になって妹を連れて村に帰る。
5. 継母は白鳥になって去る。

これはアンデルセンの話とよく似ている。比較的新しい伝播など、影響関係も考えられる。関敬吾もこのタイプの話が喜界島と沖永良部島でしか記録されていないこともあり、グリムなどの話の影響も考えられると指摘している。

2 もとの話は1810年の手稿（エーレンベルク稿）の第10番「十二人の兄弟と妹」(Zwölf Brüder und das Schwesterchen) というタイトルをつけられたもので、ヤーコプによって記録された。

この話はカッセルの牧師をしていたラムス家の姉妹による口述を書き留めたものである。

姉ユリア (Julia, 1792-1862) と妹シャーロッテ (Charlotte, 1793-1853) 二人の姉妹はツヴェールン出身で、ハッセンプフルーク家と親交があったのでグリム兄弟とも知り合う機会があったのだろう。また、初版(第2巻)に多くの話を提供したフィーマン夫人もツヴェールン出身で、その時にはまだグリム兄弟とは知り合ってはいなかったが、おそらく何らかのつながりがあったと考えられる。

1812年の初版ではこの手稿の文章が採用された。その際、手稿で悪い「義理の母」(Schwiegermutter)となっていたのが、「継母」(Stiefmutter)と変えられたりと表現上のみに留まらない変更も見られる。

その後1857年版に至るまで第9番目に置かれている。その間、一番下の弟にベンヤミンという名前がつけられるとか、棺おけが12個用意されるといった物語の道具だてがそろえられたり、十二人の兄弟が殺されなければならない理由について、「妹に国の全部を譲るため」という説明が付け加えられたりした。

3 グリム兄弟の注釈には、この話の出所は「ツヴェールンより」となっているが、それには娘が十二枚のシャツに気づいて兄たちのことをたずねる箇所はなく、この部分は「ヘッセンから」の話の借用であったことが言われている。グリム兄弟にとって両方ともに「不十分なもの」とみなされたためこのような加工が行なわれた。

はじめに見たように、グリム兄弟もこの話が同じメルヒェン集に入れられた、「七羽のカラス」(25番) や「六羽の白鳥」(49番) と同じ系列の話であることを指摘している。なぜグリム兄弟はこのように同じタイプに分類される話を三つも取り上げたかという疑問も生じるが、彼らにとっては分類よりも個々の話の展開の特徴を重視したと考えられる。

参照文献) AaTh 451, p. 153 f.; Grimms Anm., S. 20[32].; BPI, S. 70-75.; Rölleke, Älteste Slg. S. 64-68, 354.; Rölleke, Nachweise, S. 445.; Scherf, Märchenlexikon, S. 1465-1470; Uther, Kommentare, S. 21-22.; 関敬吾『日本昔話大成』、第11巻49ページおよび5巻229～232ページ。

KHM10
Das Lumpengesindel
「ならずもの」

1 アールネ／トンプソンの話型では、動物昔話の210番「おんどり、めんどり、あひる、ピン、針の旅行」にあたる。動物やいろんな物たちが家のあちこちに隠れ、それぞれの習性をいかして、家主をこらしめ、最後に死なせてしまうという話である。

グリムの話では、おんどりとめんどりが山にくるみを取りに行き、日が暮れる。歩いて帰るのが嫌になり、くるみの殻で車を作る。あひるに車をひかせて帰る途中で留め針と縫い針を乗せる。宿の亭主にうまく言って、泊めてもらう。翌朝、亭主にやると約束した卵を食べ、その殻をかまどにいれ、縫い針を椅子に刺し、留め針をタオルに刺して宿を出る。朝起きだした亭主はそのためひどい目に合う。

アールネの「旅する動物たち」(Die Tiere auf der Wanderschaft) の系統に入る話である。

日本では、「猿蟹合戦」の後半部と一致する。関敬吾はアールネの研究を受けて「猿蟹合戦」をアジア型に分類している。

2 最初の話は1812年5月19日、パーダーボルンに住むアウグスト・フォン・ハクストハウゼン (August Freiherr von Haxthausen, 1792-1866)

によって低地ドイツ語から標準ドイツ語に移し変えられてグリム兄弟のところへ送られてきた。このテクストはエーレンベルク稿には含まれていないが、グリム兄弟の遺稿集に保管されている。

初版（I. 1812）で第10番に置かれ、以後最終版まで同じ位置。本文も初版からほとんど変えられていない。

3　すでにグリム兄弟の注釈でも触れられているように、KHM41「コルベスさん」(Herr Korbes) と KHM27「ブレーメンの音楽隊」(Die Bremer Stadtmusikanten) と類似性がある。アールネおよび関敬吾によれば、「猿蟹合戦」のアジア型に対して、「ブレーメンの音楽隊」は西欧型、「コルベスさん」と「ならずもの」は東欧型と言われる。そしてアールネはこのタイプの話が特にアジアの昔話から材料を借りてきて作られたのではないかと推測している[2)]。

また、グリムの注釈ではヒンターポメルン地方の類話「猫とねずみの話」と関連があるということも言われているが、これは2番の「猫とねずみのともぐらし」の話と同じかどうかは不明。

参照文献）AaTh 210, p. 69.; BPI, S. 75-79.; Grimms Anm. S. 20[32].; Rölleke, Nachweise, S. 446.; Uther, Kommentare, S. 23; 関敬吾『日本昔話大成』第1巻、164—165ページ。

KHM11
Brüderchen und Schwesterchen
「小さな兄妹」

1　この話はアールネ／トンプソンの分類では、魔法昔話で「超自然の、または魔法にかけられた夫（女房）、あるいは他の近親者」のグループの中の450番「小さな兄妹」に分類されている。

男の子（兄）が悪い継母によって子鹿に変えられてしまい、妹と一緒に森の中に住む。妹は王子と結婚し、試練の末、兄を救い出す。

Ⅰ. 悪い継母
Ⅱ. 親切と不親切[3)]
Ⅲ. 子どもたちは家を出る
Ⅳ. 偽の花嫁
Ⅴ. 迫害される兄弟
Ⅵ. 解決（大団円）
Ⅶ. 処罰

グリムの話も大きく二つの部分（兄が動物に変えられる部分と、妹の結婚、試練、解決の部分）からなる構造を持っている。

継母にいじめられた兄妹は家を出ていく。森の中に入ると兄はのどが乾き、水を飲もうとするが、泉には魔法がかけられ、一つ目の泉の水を飲むと虎になり、二つ目の泉では、狼になり、三つ目の泉では子鹿になる。子鹿になった兄と森の小屋で暮らしていると、どこかの国の王がその森へ狩をしにやって来る。狩の騒ぎに誘われて、子鹿は三度小屋を飛び出す。そのため王が小屋の中にいる娘を見つけ、子鹿とともに城に連れて帰る。

王の妃となった娘は王子を生む。だが魔法使いの継母がやってきて、妃を殺し、かわりに自分の娘とすり替える。死んだ妃は夜になると、赤ん坊に乳を飲ませるために現われて、

「私の赤ちゃんはどうしているの。私の子鹿はどうしているの。
あと二度しか来れない。それからあとはもう来れない」と話しかける。
三度目に王が見つけ、妃は生き返る。そして継母とその娘は死刑にされる。

先に取り上げたKHM9「十二人の兄弟」はアールネ／トンプソンの451番でこれに続いている。兄弟の数が異なっているだけで、魔法にかけられた兄弟を妹が救うという展開は基本的に同じである。

2　この話は最初、1810年以前にハッセンプフルーク家の誰かからヤーコプが聞き書きしたもので、手稿（エーレンベルク稿）の32番「金色の鹿」(Goldner Hirsch) として残されている。しかし、このテクストは断片的であったため初版では採用されず、かわりに1811年3月10日にマリー・ハッセンプフルークから聞いた別の話が KHM11「小さな兄妹」となった。そして元の話は本文の注釈の中に「似たような話」として紹介された。

こちらは主に兄妹が森に行き、泉の水を飲んで動物に変わる部分が中心であり、結局三番目の泉で、男は金色の鹿になり、女は美しい大人にな

る。また、この「小さな兄妹」というタイトルは1810年の段階ではKHM15「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel) に使われていた。

その後、第二版（1819年）では、さらに1813年3月8日に再びマリー・ハッセンプフルークから提供された話と初版のテクストが混成されたものとなった。これをヤーコプは刊行以前の1817年に「ゲゼルシャフター」(Gesellschafter) という誌雑に発表している。

初版のテクストと再版のものとは筋の展開は変わりはないが、表現上の違いが多く見られる（形容詞が増え、動詞や接続詞の変更、説明文の挿入、段落分けなど)。その後最終版まではほとんど変更は見られない。

3　先に触れた初版の本文の注釈には、手稿に残された最初の「断片的な」話が取り上げられていたが、独立した注釈書になってからは省かれた。そしてただ「マイン地方の二つの話」を合わせて完全なものにしたとのみ記されている。

グリム兄弟のもとにはさらにもう一つ、H. R. v. シュレーターから伝えられた話があった。

それによると、継母によって鹿の子に変えられた男の子は犬に追われて、川辺に来る。そして妹に向かって叫ぶ。「妹よ、助けておくれ／ご主人の犬が僕を追いかけて／ものすごい速さで追い立てる／毛皮にするため／矢で射ようとする／僕の命を奪おうとする。」妹の方も継母によって鴨に変えられてしまい、「ああ、お兄さん、我慢して／私は深い地のなかにいる／地面が私のベッド／水が私の掛け布団／ああ、お兄さん、我慢して／私は深い地のなかにいる」と、お互いのやりとりが韻を踏んだ表現になっている。

このあと、妹は台所に現われ、料理人に「私の娘は何をしているの。もう糸紡ぎをしているかしら／私の小さな鐘はどうしているの。もう鳴ったかしら／私の息子はどうしているの。もう笑ったかしら。」とたずねる。

この母親の話しかける言葉は、彼らのメルヒェン集の13番目の「森の三人の小人」と似ていること、さらに、古代デンマークの歌謡やスウェーデンの話にもあることを指摘している。

グリム兄弟は他にフランスのオーノワ夫人の話も挙げているが、自分たちの話との親近性を認めている程度である。十五年間お日様を見ることを禁じられた姫がその直前に見てしまったため、森の鹿になる。狩にやってきた恋人に射られてはじめて人間の姿を取り戻すという話である。

参照文献）AaTh 450, p.152 f.; BPI, S.79–96.; Grimms Anm. S. 20〔32〕. S. 305〔317〕; Rölleke, Nachweise, S. 446.; Scherf, Märchenlexikon, S.128–132.; Uther, Kommentare, S. 23–26.

Ⅰ参考テクスト：『グリム童話集』の各版

(1)　手稿（1810年、いわゆるエーレンベルク稿）

Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der Handschriftlichen Urfassung von 1810 *und der Erstdrucke von* 1812. Hrsg. von Heinz Rölleke. Cologny-Geneve 1975.）(Rölleke, Älteste Slg. と略す)（小沢俊夫訳「メルヒェン集―エーレンベルク稿」（ドイツ・ロマン派全集第十五巻『グリム兄弟』、国書刊行会、1989年、9―115ページ）

(2)　初版（第一巻：1812年、第二巻：1815年）

Kinder-und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vegrösserter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 *und* 1815, hrsg. von Heinz Rölleke, Göttingen 1986.

(3)　第二版（1819年）

Brüder Grimm: *Kinder-und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von* 1819, hrsg. von Heinz Rölleke. 2 Bde. Köln 1982.（小澤俊夫訳『完訳　グリム童話』ぎょうせい、昭和60年）

(4)　第三版（1837年）

Brüder Grimm: *Kinder-und Hausmärchen. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage* (1837), hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt/M. 1985.

(5)　第七（最終）版（1857年）

Brüder Grimm: *Kinder-und Hausmärchen: Ausgabe Letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm,* hrsg. Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980.（金田鬼一訳『グリム童話集』岩波文庫、関敬吾／川端豊彦訳『グリム昔話集』角川文庫、高

橋健二訳『グリム童話全集』小学館ほか。)

グリム兄弟による注釈は上記(2)、(4)、(5)のテクストのなかに含まれている。特に、断りのないかぎり(5)の第3巻目に収録された「グリム兄弟の注釈(1856年)」(Originalanmerkungen der Brüder Grimm) を参照 (Grimms Anm. と略す)。

Ⅱ　主な参考文献

Anti Aarne/Stith Thompson: *The Types of the Folk-Tale*. Helsinki[3] 1961. FFC 184.) (AaTh と略す。話型分類の番号を後に示す。)

Bolte, Johannes/Polivka, Georg: *Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Bd. 1-5. Leipzig 1913-32. Neudr. Hildesheim 1963.) (BP と略す)

H. レレケによる注釈および解説は以下のとおりである。

(1) "Nachweise", in: *Brüder Grimm KHM*. Bd. 3, hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 1980, S. 441-543. (Rölleke, Nachweise と略す)

(2) "Einzelkommentar", in: *Brüder Grimm KHM. Vollständige Ausgabe auf Grundlage der dritten Auflage* (1837), hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt/M. 1985, S. 1190-1285.

(3) "Erläuterungen", in: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm, Synopse der Handschriftlichen Urfassung von* 1810 *und Erstdruck von* 1812, hrsg. von Heinz Rölleke, Cologny-Geneve 1975, S. 339-398.

(4) "Anmerkungen", in: *Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm*, hrsg. von Heinz Rölleke, Bonn 1983 (3. Aufl.), S. 95-109.

Ranke, Kurt: *Enzyklopädie des Märchens*. Berlin/New York 1977ff.

Scherf, Walter: *Das Märchenlexikon*, 2Bde., München 1995.

Thompson, Stith: *The Folktale*, University of California Press, 1977. (S. トンプソン＝荒木博之他訳『民間説話　上下』社会思想社、昭和52年)

Uther, Hans-Jörg (Hrsg.): *Kinder-und Hausmärchen: nach der grossen Ausgabe von* 1857, *textkritisch revidiert, kommentiert und durch Register erschlossen*, München 1996. Vierter Band: Nachweise und Kommentare. (Uther, Kommentare と略。)

関敬吾『日本昔話大成　全12巻』角川書店、昭和54年。

注

1) ある王に11人の息子とエリサという一人の娘がいた。王は再婚するが、新しい妃は子どもたちを追放する。小さいエリサは田舎にやられ、王子たちは魔法にかけられ、白鳥になって飛んでいく。15歳になったエリサは兄たちを探しに出かける。兄たちを救うにはイラクサで11枚のくさりかたびらを編まなければならない。その間何年かかっても口をきいてはいけない。エリサはある国の王に助けられ、結婚する。だが、魔女だと思われ、火刑にされる。そこへ11羽の白鳥が飛んできて、ちょうどかたびらが仕上がり、救われる。(大畑末吉訳『アンデルセン童話集』岩波文庫、1984年)

2) A. アールネ『昔話の比較研究』(関敬吾訳、岩崎美術社、1969年、25ページ) 参照。

3) この部分は同じ系統のKHM 13「森の中の三人の小人」(Die drei Männlein im Walde) では、主人公の娘は森で出会った小人に親切にしたおかげで、美しくなり、口から金が出て、王様と結婚することになり、継母の娘は不親切にしたために醜く、口からいぼ蛙が出て、惨めな死に方をする。KHM11 の話には現われない。